

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

2012年 11月 26日

派遣者氏名（専門分野）	村上 彩子	（ フランス文学 ）
-------------	-------	------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	ヴィクトル・ユゴー『王は楽しむ』、『双子』におけるフランソワ1世とルイ14世のイメージ——その既存イメージとユゴーによるイメージとの差異——
-------	--

**派遣期間**

2012年 10月 22日 ～ 2012年 10月 30日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	フランス	パリ	フランス国立図書館	

**派遣先で実施した研究内容**

1851年の亡命まで、常に王党派であったユゴーだが、その立場は確実に変化していた。極右的な王党派から次第に左へ傾き、ついには王政支持から縁を切る。こうした変化は当然一朝一夕に起こったことではない。なぜユゴーは王党派から離れていったのか。なぜ王政を支持できなくなったのか。王政の次にどのような体制を夢見たのか。この問いに答えるために、復古王政から七月王政にかけて出版された詩集・戯曲・小説・紀行文の中からフランス国王のイメージを抽出し、それら各国王をその既存イメージと比較して、差異の分析を行っている。

今回注目しているのが、1832年に制作・上演された『王は楽しむ』と1830年ごろから計画され1839年に執筆されるも未完に終わった『双子』に描かれたフランソワ1世とルイ14世である。この二作にはおそらく既存イメージと反するフランス国王が描かれている。この二作の研究は次のように進めている。

- ①既存イメージを整理する
- ②ユゴーの描く国王像とのイメージの差異を分析する
- ③執筆、上演前後の社会状況と照らし合わせユゴーの描くフランス像を固める

①については当時発行された歴史書、さらに当時演劇に使われた衣装が絵画から多分な影響を受けていたことを考慮し、サロンに出された絵画などからフランソワ1世とルイ14世のイメージを抽出する。特にミショーによる *Biographie universelle* (フランス国立図書館、ミッテラン館所蔵)と1820年から1840年かけてサロンに発表された作品を知ることができる Landon の *Salon (recueil des principales productions des artistes vivants exposées au salon du Louvre)* (フランス国立図書館、リシュリュウ館所蔵)を参照した。

②について、ユゴーの描く国王像がどのように受け止められていたのかを分析するために、当時の新聞に掲載された文学批評を参照することにした。フランス国立図書館が所蔵する新聞 *Le Courrier des théâtres*、*La Quotidienne*、*La Mode*、*Le Moniteur universel*、*Le Constitutionnel*、*France nouvelle*、*L'Entr'acte* (ミッテラン館所蔵) といった当時の新聞を予定より多く閲覧し、コピーをとった。さらに、演劇資料を取り扱うリシュリュウ館が所有する Auguste de Chatillon による *Le Roi s'amuse de Victor Hugo : maquettes de costumes* を参照し、

『王は楽しむ』の衣装とともに、色や形などの細部まで確認することができた。

③では、ユゴーが政治に関心が強かったことを考慮して、作品執筆・発表当時の社会状況を新聞などから分析している。特に『王は楽しむ』の禁止に関して、政府側が上演二日前に起こった国王暗殺未遂事件を理由に挙げているが、今までこの事件と『王は楽しむ』を結びつける研究はない。ユゴーが政治的意図を否定していることが原因にあるが、観客の心理に影響しなかったとは考えにくい。そこで官報 *Le Moniteur universel* (ミッテラン館所蔵) を参照し、王の暗殺未遂事件という王政にとって好ましくない事件をどのように報じているのか、または報じなかったのかについて調べた。結果、暗殺未遂の情報を報じるよりむしろ、助かった王の強運を強調し、また市民の「国王万歳」の声でもって忌まわしい事件を奇跡的なものへと置き換えていることが判明した。また同新聞から『双子』の執筆までに同じような暗殺未遂事件がその後 5 回起きていることもわかり、王政に対する過激な反発があったことがよりリアルに理解できた。

さらに、指導教官であったパリ第七大学のクロード・ミエ教授とも面会し、今後の博士論文の構成などについてご助言をいただいた。この時、今まで考慮していなかった 1830 年代の 4 つの詩集も、ユゴーのフランス王像を求めるには必要であると指摘され、博論の構成を変更し、その後プランを提出した。

## 研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

### 研究の当初の目的・計画の達成状況

当初の目的は、日本ではなかなか見ることのできない 19 世紀の新聞と演劇資料の閲覧にあった。この点では、出発前に制作したリスト通りに全てを閲覧できた。しかし、当初予定していた新聞よりも閲覧したい量が大幅に増えたため、その多くをコピーして持ち帰ることにしたため細かな分析はこれからとなる。

### 明らかにできた成果

まず、予想していたことであるが、フランソワ 1 世・ルイ 14 世とも、比較的よいイメージが 1830 年代出回っていたことが理解できた。その一方で、国王ルイ・フィリップの暗殺未遂事件は幾度も起こり、『王は楽しむ』の上演直前の 11 月 19 日、ユゴーが未完の『双子』を制作していた 1836 年にも起こっている。その全てにおいて王政側は、暗殺の失敗を王の力としてある種の奇跡として報じているが、ユゴーの描いた歴代のフランス国王たちが王政の求める姿ではなかったことがますます明らかとなり、ユゴーの描く王政と王政が求める王政にずれが生じていることがわかった。

## 派遣後の研究発表の予定

2013 年春に行われる予定の日本フランス語フランス文学会にて発表予定